余はベンメイす

坂口安吾

先日朝日評論のO氏現れ、開口一番、舟橋聖一のところには日に三人の暴力団が参上する由だが、こちらはどうですか、と言ふ。こちらはそんなものが来たことがない。来る筈もないではありませんか。

東京新聞のY先生（なぜなら彼は僕の碁の師匠だから）が現れての話でも、世間ではもつぱら情痴作家と云つてますが、御感想いかゞ、と言ふ。すると、それから、西海と東海と東京と三つの雑誌と新聞から同じやうなことを言つてきて、私の立場に就いて、弁明しろと言ふ。弁明など考へたこともないから、しろと云つても、無理だ。

朝日評論のＯ氏も弁明を書けといふ。まるでどうも、私が東京裁判情痴部といふやうなところへ引きだされて目下訊問を受けてゐるやうにきめこんでゐる様子で、私も恐縮したが、まつたく馬鹿げた話である。

かうきめつけられては、てれてニヤ〳〵する以外に手がなくなつて、さうかね、私は情痴作家ですか、などと云ふと、知友の筈のＹ先生まで、舟橋・織田も情痴作家とよばれることを厭がりますね、などと取りすましてゐる。とりつく島がない。

いつだつたか新潮社のＳ青年が現れて、サルトルは社会的責任を負ふと声明してゐますが、あなたは如何

といふ。この方はハッキリしてゐて気に入つたから、勿論だ、牢屋へでもなんでも這入る、と威勢のいゝところを見せて、ソクラテスを気取つたものだ。ぢや、あなたも声明を書きませんか、ときたから、私も憤然として、そんなこと書くのはヤボといふものだ、作家が自分の言葉に責任を負ふのは当然ではないですか、決闘して死んだ男もあるですよ（ホントかね）。あんまり見上げたことではないが自殺した先生方も多々あるです。僕など生きることしか手を知らないのだから、酒となり肉体となり、時には荘周先生の如く蝶ともなれば、こゝに幻術の限りをつくして辛くも生きてゐる

にすぎない。あに牢獄を、絞り首を怖れんや。絞り首は恐入るけれども話の景気といふもので、ザッとかういふぐあひに御返事申上げた。だいたいサルトルが書いたから私にも書けとは乱暴な。先日酔つ払つて意識不明のところを読売新聞の先生方に誤魔化されて読みもしないサルトルにつき一席口上を書いたのが運の尽きで、改造だの青磁社だのまだ出来上らないサルトルの飜訳のゲラ刷だの原稿だの飛び上るやうな部厚な奴を届けて汝あくまで読めといふ。これ実に、人泣かせの退屈きはまる本ですよ。街頭で酒店で会ふ人ごとにサルトルはいかゞとくる。まるで私が今サルトルと別

れてフランスから帰つたやうな有様だから、私もつい癪にさはつて、うん、シロでサルトルとシャンパンにカレヒのヒレを落してオカンをした奴をのんだよ、うまくなかつたね、然し実存主義よりはいくらか清潔な飲み物でした、などと言ふ。すると中には、へえ、シロつてのは何ですか。君シロを知らないですか。プルウスト先生行きつけのパリきつての上品なレストランです。こゝでシャンパンを飲んだのは日本人で拙者ぐらゐのものですよ、とおどかす。すると、へえ、あなたが、と云つて、私の行きつけの怪しき飲み屋の怪しき構へを改めてジロ〳〵見まはしたり、又は私の怪し

き洋服に目をつけたりする。巴里へいついらつしやつたんですか、ときくから、君冗談ぢやないぜ、僕は日本にいくらもゐやしないよ、戦争になつて、やむなく交換船で追ひ返されてきたのだ、実存主義なんて八九年前に僕がモンマルトルの屋根裏で寝言のつもりで言ひだして、今はもう忘れてしまつたんだ。執念深く覚えてゐるのはサルトルぐらゐのものだぜ、と云つて、あとはクダをまいてしまふ、といふテイタラクである。

　作家は弁明を書くべき性質のものではない。書くが如くに行ひ、行ふごとく書き、わが生存、わが生き方がそこに捧げられてゐるのであるから、他の何物を怖

れるよりも、自我自らを偽ることを怖れるものであり、すべてが厳たる自我の責任のもとに書き表されてゐること、元より言ふまでもない。社会的責任の如き屁の河童ではないですか。論ずるだけがヤボであり、さういふ文学以前の問題にかゝづらつて一席弁じるサルトル先生も情ない先生だが、作家に向ひ弁明などと注文せられる向きの編輯者諸先生は先づ以て三思三省せらるべし。

諸君は各々の家に於て日常何をしてをられるか？思ふに諸君（以下、君の中には女の方も入れてありますから）は、父であり、母であり、子であり、良人（おっと）で

あり、細君であり、恋人であり、諸君も亦、男女の道を行はれること当然ではないか。か丶る私事は之を人前にさらけだすべきものではなく、礼儀に於て、常識に於て、さうである如く、如何なる破壊混乱の時代に於ても、か丶る表出は礼儀化されぬ性質のものであるかも知れない。貝原益軒先生は只今房事中と来客を断られた由であるが、私はかういふ聖人賢者は好きではない。こんなところは何も正直に言ふことはないさ。只今所用があるからぐらゐで充分で、かういふ惨めな正直づらは、私はイヤだ。

文学はかういふ芸のない正直とは違ふ。かういふ時

には嘘をつく人生を建前とするのが文学のもとめる真実です。

だが、諸君は各々の私事に於て、正しいこと、自ら省みて正しいと信ずることを行つてゐられるか。諸君は信じてをるかも知れぬ。然し、それが、自ら省みることと不足のせゐであり、自ら知ること足らざるせゐであることを、さうではないと断言し得るや。カトリックに於ては、善人は天国へ、悪人は地獄へ、生れたばかりの赤ん坊は煉獄（ピュルガトワル）へ行きます。日本では普通、煉獄を地獄よりももつと悪い所のやうに考へてゐるが大間違ひで、ピュルガトワルとは天国

と地獄の中間、即ち善ならず悪ならず、無の世界で、赤ん坊は善悪に関せざる無だから赴く。私自身の宗教に於ては、赤ん坊だけではない、自ら省みて恥なしなどゝいふ健康者はみんな煉獄へ送つてしまふ。人間の真似をしてゐる人形だから。

諸君は夫婦であり、恋人達だ。諸君は男女の道を、恋人の道を行ひ、満足ですか。不安ではないのですか。平気ですか。幸福ですか。

快楽ほど人を裏切るものはない。なぜなら、快楽ほど空想せられるものはないから。私の魂は快楽によつて満たされたことは一度もなかつた。私は快楽はキラ

イです。然し私は快楽をもとめずにゐられない。考へずにゐられない。

諸君は上品です。私事に就ては礼儀をまもつて人前で喋らず、その上品さで、諸君の魂は真実ゆたかなのだらうか、真実高貴なのだらうか。

すべて人間の世界に於ては、物は在るのではなく、つくるものだ。私はさう信じてゐます。だから私は現実に絶望しても、生きて行くことには絶望しない。本能は悲しいものですよ。どうすることも出来ない物、不変なもの、絶対のもの、身に負うたこの重さ、こんなイヤなものはないよ。だが、モラルも、感情も、こ

れは人工的なものですよ。つくりうるものです。だから、人間の生活は、本能もひつくるめて、つくることが出来ます。

　私は童貞のころ、カーマスットラを読み、アナーガランガを読んだ。そこに偉大な真実、現実の哲理が語られてゐるかと思つて、何本よりも熱意に燃えて読んだほどだつた。

　私は近頃発禁になつたといふ「猟奇」だの「でかめろん」だの「赤と黒」だの「りべらる」を読む人々が、健全にして上品なる人士よりも猥セツだとは思はない。私も、もし、カーマスットラを読んだ頃のこの現実に

絶望しない童貞の頃だつたら、まつさきに、これらの雑誌を読んでみたに相違ない。不幸にして、今はもう読んでみる気にもならないです。私の方が、よつぽど、その道の達人なんだから。すくなくとも、私は退屈してゐるのです。

春本を読む青年子女が猥セツなのではなく、彼等を猥セツと断じる方が猥セツだ。そんなことは、きまりきつてゐるよ。君達自身、猥セツなことを行つてゐる。自覚してゐる。それを夫婦生活の常道だと思つて安心してゐるだけのことさ。夫婦の間では猥セツでないと思つてゐるだけのことですよ。誰がそれを許したので

すか。神様ですか。法律ですか。阿呆らしい。許し得る人は、たゞ一人ですよ。自我！

肉体に目覚めた青年達が肉体に就て考へ、知らうとし、あこがれるのは当然ではないか。隠すことはない。読ませるがよい。人間は肉体だけで生きてゐるのではないのです。肉体に就て知らうとすると同じやうに、精神に就て、知らうとし、求めようとすること、当然ではないですか。

「猟奇」「でかめろん」等々を読ませた方が、さういふものに退屈させる近道だ。読まなければ空想する。そしていつまでも退屈しない。読ませれば、純文学のケ

チなエロチシズムなどには鼻もひつかけなくなるから、文学は純化され、文学の書き方も、読み方も正しくなり、坂口安吾はエロ作家などといふ馬鹿げた読み方もしなくなるだらう。

舞台でも、さう。露出女優や露出ダンスがハンランすれば、芸術女優の芸術的エロチシズムは純化され、高められる。

露出だの猥本などといふものは、忽ち、あきてしまふものですよ。禁止するだけ、むしろ人間を、同胞を、侮辱してゐるのです。さういふ禁止の中で育てられた諸君こそ、不具者で、薄汚い猥漢で、鼻もちならない

聖人なのだ。人間は本来もつと高尚なものだよ。肉体以上に知的なものですよ。露骨なものを勝手に見せ、読ませれば、忽ちあいて、諸君のやうな猥漢は遠からず地上から跡を絶つ。

肉体なんか退屈ですよ。うんざりする。退屈しないのは、原始人だけ。知識といふものがあれば、退屈せざるを得ないものだ。快楽は不安定だといふけれども、犬だの野蛮人の快楽は不安定ではないので、知識といふものが、不安定なのです。

結婚するなら、肉体に退屈してからやりなさい。否、結婚ぐらゐ、なんべんやりなほしてもよいではないで

すか。退屈するまで、やり直しなさい。最も、やり直すのが面倒くさかつたら、やり直す必要はないです。これ又見上げた心掛だな。本当に、面倒くさかつたら、ネ。女房を追ひ出すのは面倒だが、会社へ行くのは面倒ではない、などといふのは、インチキですよ。徹底的に面倒くさいといふ人は、多分、一番偉いんだらう。そのくせ、飯を食ふなんて、どうも、イヤだな。

失礼しました。私はまつたくダメです。なぜなら、私は教師ではない。私は生徒です。そのくせ、一場のお説教に及んだ度胸はあさましい。

私は、たゞ一個の不安定だ。私はたゞ探してゐる。

女でも、真理でも、なんでも、よろしい。御想像にお任せする。私はただ、たしかに探してゐるのだ。

然し、真理といふものは実在しない。即ち真理は、常にたゞ探されるものです。人は永遠に真理を探すが、真理は永遠に実在しない。探されることによつて実在するけれども、実在することによつて実在することのない代物です。真理が地上に実在し、真理が地上に行はれる時には、人間はすでに人間ではないですよ。人間は人間の形をした豚ですよ。真理が人間にエサをやり、人間はそれを食べる単なる豚です。

私は日本伝統の精神をヤッツケ、もののあはれ、さ

び幽玄の精神などを否定した。然し、私の言つてゐることは、真理でも何でもない。たゞ時代的な意味があるだけだ。ヤッツケた私は、ヤッツケた言葉のために、偽瞞を見破られ、論破される。私の否定の上に於て、再び、もののあはれは成り立つものです。ベンショウホウなどと言ふ必要はない。たゞ、あたりまへの話だ。人は死ぬ。物はこはれる。方丈記の先生の仰有る通り、こはれない物はない。

もとより、私は、こはれる。私は、たゞ、探してゐるだけ。汝、なぜ、探すか。探さずにゐられるほど、偉くないからだよ。面倒くさいと云つて飯も食はずに

永眠するほど偉くないです。

私は探す。そして、ともかく、つくるのだ。自分の精いっぱいの物を。然し、必ず、こはれるものを。然し、私だけは、私の力ではこはし得ないギリ〳〵の物を。それより外に仕方がない。

それが世のジュンプウ良俗に反するカドによつて裁かれるなら、私はジュンプウ良俗に裁かれることを意としない。私が、私自身に裁かれさへしなければ。たぶん、「人間」も私を裁くことはないだらう。

★

私はこゝまで書いてきて、やめるつもりであつたが、余はベンカイしない、などと云つて、結構ベンカイに及んだ形であるから、憤然として、ペンを握つた。
今はもう、夜が明けるところです。私は目下、長篇小説に没頭してゐるのだ。だから約束した諸方の原稿を全部お断り願ひ、延期していたゞいたといふ次第なのに、朝日評論のO先生だけ、頑として、実に彼は岩石です。女の子も、これほどツレないものではない。おかげで私はヒロポンをのみ、気息エンエン。氏は実に二日目毎に四回麗人の使者を差向け、最後に、遂に、

氏自ら現れて脅迫されるに及んで、私も泣いた。これ実に本日白昼の出来事です。大悲劇です。

私は聖徳太子ではないのだから、頭は一つ、手は一本（ペンを握る手はですよ。両手はきかないよ）昨日は昨日で、東京新聞のタロちやんなる重役先生が何食はぬ顔をして、余の仕事ぶりを偵察にきて、エヘラ〳〵帰つて行つた。私も遂に探偵につきまとはれる身となつて、近頃は心臓が心細くて仕方がないのだから私はベンカイなどは断じてイヤだと言ふのだが、環境の悪化のせゐで、ダメでした。

ちやうど一番電車が通つたから、私も一つこのへん

から、大攻勢にでてやらう。夜明けはある、私にも。たぶん、アルデセウ。私は希望に生きるですから。

小説を読むなら、勉強して、偉くなつてから、読まなければダメですよ。陸軍大将になつても、偉くはない。総理大臣になつても、偉くはないさ。偉くなるといふことは、人間になるといふことだ。人形や豚ではないといふことです。

小説はもと〳〵毒のあるものです。苦悩と悲哀を母胎にしてゐるのだからね。苦悩も悲哀もない人間は、小説を読むと、毒蛇に嚙まれるばかり。読む必要はないし、読んでもムダだ。

小説は劇薬ですよ。魂の病人のサイミン薬です。病気を根治する由もないが、一時的に、なぐざめてくれるオモチャです。健康な豚がのむと、毒薬になる。私の小説を猥セツ文学と思ふ人は、二度と読んではいけない。あなたの魂自身が、魂自体のふるさとを探すやうになる日まで。

私の小説は、本来オモチャに過ぎないが、君たちのオモチャではないよ。あつちへ行つてくれ。私は、もう、ねむい。

底本：「坂口安吾全集　05」筑摩書房
　　1998（平成10）年6月20日初版第1刷発行
底本の親本：「朝日評論　第二巻第三号」
　　1947（昭和22）年3月1日発行
初出：「朝日評論　第二巻第三号」
　　1947（昭和22）年3月1日発行
入力：tatsuki
校正：noriko saito
2009年1月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。